

「小農社会」の「近世化」と「東アジア資本主義」

桃木 至朗

文学研究科世界史講座（東洋史学専門分野）

momoki@let.osaka-u.ac.jp

〔要旨〕「近代を疑う／見直す」ことと並ぶ近年の歴史学の主要潮流に「近世の見直し」がある。後者は世界の構図や世界各地・各国について広く進められているが、中でもダイナミックな歴史像の変化は、東アジア・東南アジアなどユーラシア東部の地域・海域をめぐっておこっている。その背景には 20 世紀末に「東アジアの奇跡」と呼ばれた経済発展、その後の中国の大国化（帝国化）などがある。今回はそうした東アジア独特の資本主義発展の起源としての、「小農社会」の形成とその「近世化」について、欧米型のモデルと違った特徴や論争点を整理する。それは、「発展」の議論自体を近代主義だとして否定するものではない。しかし、中国の帝国性だけでなく現在の東アジアをおおう格差と過労死の社会、少子高齢化と人口減少の社会を説明する意味ももち、単純な経済成長賛美ではとうていありえない。

〔参考文献〕桃木至朗「東アジアの少子化を歴史的に理解する」秋田茂・桃木至朗（編）『グローバルヒストリーから考える新しい大学歴史教育——日本史と世界史のあいだで』（大阪大学出版会、2020 年）

1. 冷戦終結後の歴史学の立ち位置はどう変化したか：East Asian Miracle（World Bank 1993）から少子高齢化と COVID-19 へ¹

- －「グローバル化の進展と民主化の広がり」という楽観的未来像が色あせる。
- －地球温暖化とフクシマが突きつけた資源環境問題や地球温暖化の切迫、それとは裏腹に東アジアのとめどない少子高齢化と人口減少が招く危機
- －IT 化の進展（AI の急成長など→society 5.0？）による「別の人類」の登場？・・・歴史学の周辺でも計量史学や歴史人口学の躍進²
- ＋「近世に眠り込んだ（東）アジア諸国は自力で近代化ができず、Western Impact 後に西洋から近代国家・社会のモデルを受け入れざるを得なかった」「そこで他のアジア諸国がうまくいかないのに対し、日本だけが近代化に成功した」という前提にもとづく研究・教育や議論は「強制終了」が求められていないか。
- ＋代わりに求められる「基本の問い」は、①なぜ東アジアでは、経済・暮らしや大衆文化などの猛烈な近代化・発展の一方で、政治とジェンダーはそうならないのか？、②なぜ世界でもっとも激しい少子高齢化は東アジアで進んでいるのか？ なぜ仏・北欧などのような対策はとれないのか？ などであるはず。
- ＋現在の日本で行き詰まっているのは、「キャッチアップ型で表面的な近代化」だけであろうか、むしろ「長い近世（過ぎ去ろうとしない近世）」の行き詰まりではないだろうか³？

2. 世界をおおう「近世／初期近代 the Early Modern era」の見直し

2.1. 近世史の見直し [歴史学研究会（編）2006；岸本 1998、2006；秋田（編）2018 ほか]

- －一國史とその寄せ集めでない「つながった世界の近世史」（cf. 近代世界システム論）
- －「ヨーロッパで内在的必然として起こった、人類の普遍モデルとしての近代（近代化

¹ 史学史そのものではないが、平成の 30 年を中心とした歴史学と論壇の動きについて、與那覇潤の興味深い評論がある [與那覇 2020、與那覇・斎藤 2020]。

² マディソンによる世界各地の長期の GDP 推計 [マディソン 2015 ほか] はきわめて有名で、各地域でこれを批判・精密化しようとする研究が進んでいる。また生活水準論争について [山本 2020]、歴史人口学については [落合（編）2006、2015]、日本史への応用については [深尾・中村・中林（編）2016a、2016b] など参照。

³ 與那覇潤 [2014] はこれを、近現代日本に繰り返し現れる「再江戸時代化」のモーメントとして論じている。

modernization、近代性 modernity)」という思想の否定ないし相対化、ちがった近代の可能性やその前提となる多様な「伝統社会」の探究⁴（例：ポメラantz [2015（原著 2000）] の大分岐論）

- ー近代アジアの自律的側面や、「東アジアの奇跡」とその後の展開に注目する研究（例：[浜下・川勝（編）1991] や [杉原 1996] に始まる「アジア間貿易論⁵」、中村哲 [2000、2019 ほか] の「東アジア資本主義論」、フランク [2000（原著 1998）] の「リオリエント」など）

2.2.東アジアと日本の「近世（化）」をめぐる論争

- ー中村哲 [1977] の「小経営生産様式論」を発展させた宮嶋博史 [1994 ほか] の「小農社会論」と、速水融・杉原薫らの「勤勉革命 Industrious Revolution」論 [杉原 2004 ほか]：「イギリス産業革命」型の「農民層分解」と農業の大規模化（地主と農業労働者による）、土地を失った農民の都市への流入（および海外移民）と農村から切り離された労働者階級を一方の極とする工業化というモデルとは違った、家族経営を営む小農（自作・小作両方を含む。農家内での手工業を含む多角的生産と近在の町場や遠隔地への奉公・出稼ぎなどに家族総出で当たり、所得や生活水準を向上させる）を主役とする市場経済⁶の発展（領主や地主は「不在地主」化し直接経営から撤退）が実現したと考える⁷。

+ 朱子学化を一焦点とする「近世化論」[歴史学研究会（編）2006；趙・須田（編）2011；清水光明（編著）2015 ほか]

- ーこれらが、「アジア間貿易」とならんで、近代における日本を筆頭とする東アジアの資本主義化・工業化の基盤となる（東アジア近代化は単なる西洋モデルの移植ではない）[中村哲 2010；2019a；谷本 2003 ほか] ⇒①大企業と中小零細企業の二重構造（しかも両方とも家族主義イデオロギーが好き）⁸、②農家出身であるため比較的低賃金で済む勤勉で有能な労働力の豊富な供給、③権威主義政権（明治日本から開発独裁や現代中国政府まで）や包括政党（自民党が典型）と強力な官僚制による効率的な統治などに反映。

* 所有面での地主制度ばかり見て土地改革が農村近代化に直結すると思ひ込んだり、大規模生産イコール近代化として小農経済や商工業での中小零細経営を後進的・封建的と決めつけるような、西側・東側両陣営共通の思考法を根本的に批判。

- + 勤勉革命論と朱子学化論のどちらも、日本の特殊性や日中の分岐が焦点となる←経済的には「長い 18 世紀」の終盤以降の日本の経済成長と中国・朝鮮（・ベトナム北部？）の停滞⁹、政治・社会的には「武威」を正当性原理の根幹に据えるがゆえに、小農社会に適合的な

⁴ そこには近代人が否定にせよ肯定にせよ「ずっと昔からあるもの」と思ひ込んだ伝統が、「近代化直前の状態」や「近代そのものが創り出したもの」にすぎない点を突いた「伝統の創造」論 [ホブズボウム、レンジャー（編）1992 など] の影響もある。

⁵ 近世のそれについては [桃木・山内・藤田・蓮田（編）2008] [羽田（編）2013] も見よ。

⁶ たとえば日本では、18 世紀後半～19 世紀前半にはっきりした経済成長が見られるが、その時期に大都市の人口は停滞する一方で、在郷町など農村地域の都市的空間が成長している [深尾・中村・中林（編）2016b]。

⁷ 背景にはヨーロッパと比べた東アジアの人口密度の高さと土地不足（しかもヨーロッパは大規模な新大陸への移民で人口圧力を緩和できたが東アジアはそこまでできなかった）[大島（編）2009] および、畜力の利用が少なく特定のシーズンに大量の人出を要する稲作（そのために多数の農業労働者を抱えておくより、農繁期には家族・親族総出で働き農閑期には別の副業や奉公・出稼ぎで働く方が合理的）と、畜力の役割が大きく労働力需要の季節変動が小さい小麦などの畑作（一定数の農業労働者が常時いてよい）の差異があったと説明される [中村 2019a ほか]。

⁸ 近代経済学ではこれは、アーサー・ルイスの「二重経済」と発展途上国の「無限労働力供給」モデルとして説明される。

⁹ ほかに、社会の基礎単位となる近世日本の直系家族（両親夫婦、跡取り夫婦、その未婚の子供たちの 3 世代から成る）と中国の宗族（横の大きな広がりをもつ父系親族集団）の差異、中国の専制国家 [足立 1998] のもとでの公的・制度的中間団体の不在（たとえば村落は共同体性をもたない）、それを補う非公式の集団やネットワークの発達と日本の幕藩制や村・町などの「団体型社会」のコントラスト、比較的高い税率と民衆の把握の一方で地域や国家による公的なインフラ建設もかなり進む日本と、公式には極めて

朱子学イデオロギーの全面受容ができず「儒教的近代」に進めなかった日本が、余儀なくされた西洋型近代化¹⁰（脱亜入欧型の侵略性に至る）と「脱亜入欧史観やその裏返しのアジア停滞論に無反省な日本史学界という宮嶋博史 [2006 ほか] の批判¹¹と、それに対する日本史学界その他の反発。

+近世と近代が別の時代であるという前提の上で「中世から近世への以降」だけを論じる日本史の近世化論（近代への影響は間接的ではない）と、「儒教的近代」など近世を近代と直接結びつけて論じようとする東洋史（中国史・朝鮮史など）のズレ。

（参考）20世紀前半～中盤に展開した日本資本主義論争と中国史の時代区分論争

ー日本資本主義論争：1930年代におこなわれた、「絶対主義天皇制」の後進性・封建制を強調する「講座派」（→まずブルジョワ民主主義革命、その後に社会主義革命という「二段階革命論」と、資本主義の発展を評価する「労農派」（→社会主義革命を直接の目標とする）の間での、日本革命の方向性をめぐる論争。内容は明治維新の評価、地主制の構造など多岐にわたった。戦後も日本独占資本主義の後進性や対米従属を強調する共産党系と、独立した帝国主義としての性格を重視する社会党系などの論争が続いた。

ー1920～30年代に中国で行われた「中国社会性質・社会史問題論戦」に続き、戦後日本で1940年代末から60年代にかけて、「歴研派」（社会主義化した中国は資本主義の日本より先に行ったと見る者が多かった）と「京都学派」の中国史の時代区分論争など多くの論争が展開され [谷川（編）1993]、関連して地主制論争、資本主義萌芽論争なども行われた。これも全体としては、日中両国の革命や発展をどう評価し実現するかという視点からの論争だった。+どちらも議論の多くは、マルクス・レーニン主義（という名のスターリンの図式）や「近代市民社会」をはじめとする近代西洋の発展段階モデル（それは「所有」と「生産様式」や「類型」「理念型」など抽象度の赤い議論だった）を、東アジアの現実に（国単位の一國史として）当てはめようとするものだった→農民層分解と農業の大規模化など、西欧（イギリス）の特殊な展開を近代化や資本主義化の普遍的なモデルと見なす¹²歴史像を共有 [→冷戦期にも両陣営が競った農業の大規模化]。

+1960年ごろまでは、日本史の講座派理論や、中国史の近代を「半植民地・半封建社会」と見る毛沢東史観（日本の歴研派も似た史観→アヘン戦争前は「地主的封建制」の社会＝中世¹³）など、両国とも近代社会の後進性・奇形性を強調する見方が支配的だったが、1970年代以降には、「資本主義陣営においてはアメリカ帝国主義に支配されて発展できない」はずの日本やその他東アジア諸国のめざましい発展（1950～60年代アメリカで唱えられた「近代化論¹⁴」の勝利？）、その逆の社会主義陣営の衰退と中国の市場経済への転換などが起こり、これらの抽象的議論の意味も失われ、冷戦終了後には忘れ去られた。代わってマイクロであれマク

低い税率で民衆把握も後退インフラ建設や福祉が宗族や有力者などの私的活動に委ねられる中国などなど、対比の論点は数多い [與那覇 2014 も見よ]。それぞれ、朝鮮・ベトナムや琉球を含めた比較も意義があるだろう。

¹⁰ もっとも思想史学界では、中央集権的な一君万民体制を理想とする朱子学化は、日本では明治維新後にこそ実現したという見方も有力ある [小島 2017 など]。

¹¹ この批判をめぐる論争はその後、「韓国併合」100周年をめぐる議論 [国立歴史民俗博物館（編）2011 ほか] の中でエスカレートした面がある。

¹² 近代における「中農標準化」を唱えるチャヤノフなど少数派の見解はほとんど顧みられなかった。

¹³ 梁啓超以来の中国歴史学や内藤湖南以来の京都学派は、中国にさまざまな「近古」「近世」（初期近代の意味で？）を見いだしたが、中国革命後しばらくは、アヘン戦争まで封建社会（中世？）が続いたという見方が主流になった、他方日本史については、日本のアカデミズムにおいて、古代～中世～近世～近代（近現代）という4区分が1945年以前から成立しており、マルクス主義と非マルクス主義のどちらも、江戸時代を封建社会と見なしつつそれを近世と呼ぶ習慣が一般化していた。

¹⁴ 西欧や日本は封建社会を前提とする近代化が可能だったが（西欧型の分権的な）封建社会を経過しない中国などはそれが困難だ、という歴史観を伴いつつ、発展途上国における「日本で成功したような」資本主義化・工業化を展望する理論だった。日本でこの議論がもった思想史的意義については [荻谷 2019]。

ロであれもっと具体的なレベルに着目する「社会史」や「グローバルヒストリー」が発展。近現代世界に存在する抑圧や差別・暴力に注目する「ポストモダニズム」の諸研究（その多くが政治と文化に着目）も、それらを「近代化の遅れ」でなく「近代性そのもの」に由来すると考えた。

3. 2020年に終わろうとしているのは何か、次に来るのはどんな時代か

+小農社会に関する「講座派」の農村像や、「貧困の共有」[ギアーツ 2001]は忘れてよいだろうか¹⁵?

—小農社会出身の労働力が十分供給されなくなった段階（その家族が十分な出生率¹⁶を保証できなくなった段階）でどうすべきか[中村 2019b]。それについて東アジア諸国やその企業社会が1990年代末以降にとってきた賃金や出生をめぐる政策・対策（儒教的家族と近代家族の折衷から抜け出ようとしなさい？）は正しいか。

+そして、次に来るのは「近世のやり直し」か「新しい中世」か（どちらにしてもそれは、「日本的」なそれかもっと「中国的」なそれか）、それとも人類史上初めての段階か？

参考文献

- 秋田茂（編）2019.『世界史叢書2 グローバル化の世界史』ミネルヴァ書房。
エマニュエル・トッド（荻野文隆訳）2008.『世界の多様性 家族構造と近代性』藤原書店。
足立啓二 1998.『専制国家史論』柏書房。
大阪大学歴史教育研究会 2014.『市民のための世界史』大阪大学出版会。
大島真理夫（編）2009.『土地希少化と勤勉革命の比較史』ミネルヴァ書房。
落合恵美子（編著）2006.『徳川日本のライフコース 歴史人口学との対話』ミネルヴァ書房。
落合恵美子（編著）2015.『徳川日本の家族と地域性 歴史人口学との対話』ミネルヴァ書房。
荻谷剛 2019.『追いついた近代 消えた近代：戦後日本の自己像と養育』岩波書店。
岸本美緒 1998.「東アジア・東南アジア伝統社会の形成」『岩波講座世界歴史 13 東アジア・東南アジア伝統社会の形成 16～18世紀』岩波書店。
岸本美緒 2006.「中国史における「近世」の概念」『歴史学研究』821、pp.25-36。
木下光生 2017.『貧困と自己責任の近世日本史』人文書院。
クリフォード・ギアーツ、池本幸生（訳）2001（原著 1963）.『インボリューション 内に向かう発展』NTT出版。
久留島典子・長野ひろ子・長志珠絵（編）2015.『歴史を読み替える ジェンダーから見た日本史』大月書店。
K.ポメラント（川北稔監訳）2015.（原著 2000）『大分岐—中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成—』名古屋大学出版会。
国立歴史民俗博物館（編）2011.『「韓国併合」100年を問う 2010年国際シンポジウム』岩波書店。
小島毅 2017.『儒教が支えた明治維新』晶文社。
小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子（編）2017.『中国ジェンダー史研究入門』京都大学学術出版会。
清水光明（編著）2015.『「近世化」論と日本 「東アジア」の捉え方をめぐって』勉誠出版（アジア遊学 185）。
杉原薫 1996.『アジア間貿易の形成と構造』ミネルヴァ書房。
杉原薫 2004 本の家族に.「東アジアにおける勤勉革命径路の成立」『大阪大学経済学』54(3)：336-361。
高木純一 2020.「東アジア「近世化」論と日本の「近世化」」秋田茂・桃木至朗（編著）『グローバルヒストリーから考える大学歴史教育——日本史と世界史のあいだで』大阪大学出版会、pp.239-265。
谷川道雄（編著）1993.『戦後日本の中国史論争』河合文化教育研究所。

¹⁵ 近世日本の、公助・共助を受けようとする貧家を叩くような冷酷な面、その中国やヨーロッパとの対比を語る[木下 2017]も現代的インプリケーションに満ちている。

¹⁶ 近世以降の日本の家族や出産については[落合（編）2006、2015；久留島ほか（編）2015]、中国については[三成ほか（編）2014；小浜ほか（編）2017]参照。

- 谷本雅之 2003. 「近代日本の女性労働と「小経営」」氏家幹人・桜井由幾・谷本雅之・長野ひろ子（編）日本近代国家の成立とジェンダー』柏書房（KASHIWA 学術ライブラリー05）、pp.144-187.
- 趙景達、須田努（編）2011. 『比較史的にみた近世日本—「東アジア化」をめぐる』東京堂出版.
- 中村哲 1977. 『奴隷制・農奴制の理論』青木書店.
- 中村哲 2000. 『近代東アジア史像の再構成』桜井書店.
- 中村哲 2019a. 『東アジア資本主義形成史論』汲古書院.
- 中村哲 2019b（初出 2010）. 「現代の歴史的位置」『東アジア資本主義形成史論』汲古書院、pp.65-93.
- 羽田正（編）・小島毅（監修）2013. 『東アジア海域に漕ぎだす1 海から見た歴史』東京大学出版会.
- 濱下武志・川勝平太編 1991. 『アジア交易圏と日本工業化 1500-1900』リポポート.
- 深尾京司・中村尚史・中林真幸（編）2017a. 『岩波講座日本経済の歴史 1 中世』岩波書店.
- 深尾京司・中村尚史・中林真幸（編）2017b. 『岩波講座日本経済の歴史 2 近世』岩波書店.
- フランク、アンドレ・グンダー、山下範久（訳）2000（原著 1998）. 『リオリエント：アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店.
- マディソン、A.（政治経済研究所監訳）2015（原著 2007）. 『世界経済史概観 紀元1年—2030年』岩波書店.
- 三成美保・姫岡とし子・小浜正子（編）2014. 『歴史を読み替える ジェンダーから見た世界史』大月書店.
- 宮嶋博史 1994. 「東アジア小農社会の形成」溝口雄三ほか編『アジアから考える 6 長期社会変動』東大出版会、pp.67-96.
- 宮嶋博史 2006. 「東アジア世界における日本の「近世化」——日本史研究批判——」『歴史学研究』821、pp.13-24.
- 桃木至朗 1997. 「周辺の明清時代史——ベトナム経済史の場合——」（森正夫他編『明清時代史の基本問題』、汲古書院、1997・10、pp.607-634.）
- 桃木至朗 2009. 『わかる歴史、おもしろい歴史、役に立つ歴史—歴史学と歴史教育の再生をめざして』大阪大学出版会.
- 桃木至朗 2020. 「現代東アジアの少子化を歴史的に理解する」秋田茂・桃木朗（編著）『グローバルヒストリーから考える大学歴史教育——日本史と世界史のあいだで』大阪大学出版会、pp.321-347.
- 桃木至朗・山内晋次・藤田加代子・蓮田隆志（編）2008. 『海域アジア史研究入門』岩波書店.
- 山本千映 2020. 「生活水準の比較史——イギリスと日本」秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーから考える大学歴史教育——日本史と世界史のあいだで——』大阪大学出版会、pp.269-294.
- 與那覇潤 2014. 『「中国化」する日本』文春文庫（原著 2011 年、文藝春秋）.
- 與那覇潤 2020. 『荒野の六十年 東アジア世界の歴史地政学』勉誠出版.
- 與那覇潤・斎藤環 2020. 『心を病んだらいけかいの？』新潮選書.
- 歴史学研究会（編）2006. 「特集 「近世化」を考える（I）」『歴史学研究』821 号.
- World Bank 1993. *EAST ASIA MIRACLE: Economic Growth and Public Policy* (A World Bank Research Report).